

徐々にボルテージを上げ、竜が天に昇るように白い煙がうねりながら上昇していく。護摩木の組み方に秘訣があるのか。それとも、加持祈祷が天に通じているのか。

奥駆病

夫「お坊さんになっっているんな儀式をしましたけれど、外でやる護摩ほどダイナミックな宗教儀礼はありません。お堂のなかでどんな立派なお経を読んでもよく見えないでしょ。護摩はみんなが四方から取り囲むなかで煙が上がる」

妻「檜葉のパチパチという音がいいですよね」

吉野山から熊野本宮大社（和歌山県本宮町）まで続く修行の道・大峯奥駆道は昨年、ユネスコ世界文化遺産に登録された。夫は登録活動の先頭に立った。毎夏、自ら山伏の衣装をまとい、紀伊半島を背骨のように貫く霊峰大峯山脈を尾根づたいに170キロにわたって七泊八日で歩く奥駆修行をしている。聖地中の聖地である大峯山山上ヶ岳（標高一七一九メートル）は今なお、女人禁制

が守られている。

妻「朝2時、3時から12時間以上、山道をずっと歩きますよ。雨が降っても汗をかいても、毎日洗えるわけでもない。干しても生乾きの状態で、臭いし、汚いし、しんどいのよね」

夫「山伏は、山に入っこそ山伏です。奥駆修行をする、と、一度死んで生まれ変わると言われている。大峯山には何もありません。非日常の世界です。都会生活で自身を失った人たちが山でへ口へ口になって修行し、自分をリセットして蘇生して帰っていく。二度と行きたくないほど疲れるんですけど、二度と来るかと怒って帰った人ほど、またやって来る」

妻「それを主人たちは『奥駆病』と呼んでいるんですよ。女の私には全然分からない」

夫「現代社会で人々は自分を失っています。会社にも地域にも家族にもどこにも帰属していません。日本人

は、神も仏も人間も自然の営みのなかにあり、自然そのものであるという信仰を持ってきました。自然のなかに入ってへ口へ口になることで、自分は自然の一部であると再認識できるんです」

妻「年末に宏宜を連れて山登りに行ったんですが、主人は『山に行くとき血が騒ぐ』と言って、宏宜をだっこしているのには姿が見えなくなるんですよ。夫婦で山登りにしているのに、『体が覚えている』と言ってホイホイ先に行ってしまう」

京都・綾部に生まれた夫が奥駆修行に初めて参加したのは5歳のとき。山伏の父親に連れていかれた。

女人禁制

夫「在家でありながら修行するのが山伏の本分。親父は国鉄に勤めながら修行していました。綾部はもともと行者信仰が厚いところで。昔はもつと厳格で、家族のものも精進していました。親父は、着々と私がこの道を歩むようにしていったのだと思います」

妻「私も行きたいなと思いますよ。ひざも悪いし、若いうちに行きたいなという気持ちはあります。小学校の間学校でも、大峯山に登ったのは男子だけでした。女も入らせてくださいと毎年訴えにこられる人の意見も同姓としてわかる。女人禁制を守っている人たちの意見もわかる」

夫「女人禁制によって大峯山の非日常性、聖地性が高められてきたのは間違いありません。ただし、女人禁制自体は信仰ではない。大切なのは、今の時代に禁制を堅持することが、大峯山の信仰を守っていくのに大事かどうかです。これは、信仰にかかわっている宗教者たちが問い直すべき問題だと思います。ジェンダーフリーの人たちが、人権問題として開けると主張する問題ではありません。そんなことをしたら先人たちに申し訳ない」

妻「家でも議論したこともあります。私が『開けたら』といって、主人が『開けるわ』という問題でもない

んです」

夫は大学卒業後、金峯山寺に勤めた。吉野山にある東南院の宿坊でアルバイトしていた妻と出会ったとき、妻は高校生だった。

夫「かわいらしいなと思って……」

妻「お坊さんの格好していたら、だれも彼も同じに見えますやん。違いは、眼鏡をかけているか、いないかだけ（笑い）。部屋を準備していたときに主人に文句をつけられたことがあって。30歳を超えて結婚してはるんやないかと思ってました。私は専門学校を卒業したあと、金峯山寺の事務をするようになって」

夫「ぼくが一生懸命口説きました」

妻「最初は断ったんですよ。私は軽井沢の教会でウエディングドレスを着て、馬車に乗って結婚するのが夢でした。そしたら、『前代未聞だけど、東南院でウエディングドレスを着させてあげるから』と言われて」

夫「ウエディングドレス買いましたん（笑い）。東南院

で赤い毛氈を引いたのは、私たちの結婚式が初めてでした」

ほどなく、夫妻は吉野を離れ、夫の父が建てた綾部の寺に移った。夫は93年夏、護摩堂に120日間こもって護摩を焚き続ける修行「一千座護摩供」に挑んだ。夏場は堂内温度が60度を超える。金峯山寺関係寺院では戦後初の苦行だった。

五穀断ち

夫「普段は坊さんかどうかわからんような生活なんで、日常を離れ、大きく期間を定めて修行したいという気持ち折、私のなかで生まれるんです」

妻「朝2時に起きて、1日9回護摩焚きをするんですよ。おばあちゃんと私は5時に起きて、精進料理を作りました。寝食も別で、夫婦の会話は『おはよう、こんにちは、おやすみ』くらい。主人はいつもイライラしていて、『余計なことはわずらわしいので聞かすな』、『気が散るから子供も外で遊ばすな』と言って。いちばん上のお姉

ちゃんはまだ幼稚園で、パパさんを怖がっていたんですよ」

夫「髭がすごく伸びていて……。家族に負担をかけました。最後は五穀（米、麦、大豆、小豆、胡麻）断ちをしただんであまり手はかからなかったと思うけど」

妻「いや、そのほうが大変ですよ。おそば屋さんにおそば粉をわけてもらって、それを練ったものをお湯のなかに落として。野菜は苦いですから、主人に内緒で塩もみして、何回も水でさらって、塩気がないようにして渡しました」

夫「五穀と塩を断つと、体が浮くような気がしました。体重が79キロから64キロに落ちて、飛ぶんと違うかなと思った（笑い）。でも、実は修行で得たものはあまりないんです。むしろ修行しても何にもならないとわかったことに意味がありました」

妻「……。あんなに苦労した4カ月間なのに、何も得たものがなかったの」

夫「髭をしばらくそのままにしておこうと思ったんですが、お世話になった和尚から『行で得たものは捨てなさい』と言われ、さっぱり剃りました。そういうのを残しておく、いつまでも『俺は行をやり遂げたんだ』と肩に力が入ってしまうんです。得たものはなかったけど、捨てたことは良かった」

苦行を終え、夫は総本山の仕事に駆り出されることが多くなった。

妻「金峯山寺から月に1週間でも10日でもいいからと言われるようになって。私は最初、『1週間か10日だけやで』と言っていたのに、いつの間にか半月になって、今はほとんどこつち」

夫「単身赴任13年目になりました。実はうちのお袋も奈良出身なんです。うちは奈良にはえらいご縁があつて。弟は吉野山の東南院に養子に入りました。奈良の人が綾

部を守り、綾部の者が吉野にいる」

昨年7月、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され、金峯山寺の参拝者は数倍に増えた。夫は「修験道ルネサンス」を提唱し、秘仏とされてきた金剛蔵王権現像の特別開帳にも踏み切った（今年6月末まで）。

神と仏と

夫「99年末に日光の社寺が世界遺産登録されました。

山岳信仰ではうちが本家やないか、日光は分家やないか、という気持ちがあつたんです。吉野町の役人に聞くと、『和歌山が動いている。和歌山だけ先に認められるとうちは認められん』と。それで奈良県に働きかけて、和歌山、奈良、三重の三県あがての活動に発展しました」

妻「中国の蘇州であつたユネスコの会議でみんなが真剣に話し合っているのを見て、すごいなと思つて」

夫「明治維新で日本人の精神文化だった神仏習合は壊されました。日本人はお宮参りをしたり、仏前でお葬式を

したり、クリスマスを祝つたりしているのに、みんな自分は無宗教と思つている。でも、そんなことはない。日本には雑多で多神教的な世界観があるんです。1300年の歴史を持つ修験道は、神と仏が融合した日本独自の信仰です。今の世界はひとつの価値観でくろうとするから、キリスト教やイスラム教の『文明の衝突』が起きる。日本人は今こそ、その多様性を自信をもつて世界に発信していけるはずですよ」

妻「世界遺産になつたから終わりではなくて、それをこの先どう守つていくかだと思つんです。確かに観光客は増えましたが、さつきまで拝んでいた人がタバコをポイ捨てする姿も見かけました。いろんな人が来る中でどう守つていくか。それが主人の仕事かなと思います」

昨年のもうひとつおめでたいことがあつた。4人目の子、宏宜くんの誕生だ。

妻「昔は綾部に帰れば家のパパさんでした。でも、パソコンや携帯ができてからは家でもパソコンの前に座つて

ばかり。寂しいですよ。体は家にあっても、心はパソコンによって本山に引き戻されている」

夫「……」

妻「上の子供たちが思春期になつて会話がなくなつていたんです。子供がもうひとりできれば心は満たされるかなと思つて。宏宜を授かり子供たちが優しくなつた。家族がひとつの部屋でいることも増えました。パパさんもその場においてほしいんですよ。主人はよく金峯山寺を何とかしよう、日本や世界を何とかしようと言います。」

『田中家の平和が世界の平和に通じると違うん？』と言つても、『僕はそんな小さな人間ではない』と言うし」

夫「田中家を一生懸命する人は、日本や世界のことを心配せん。日本や世界のことを心配すると、田中家のことは二の次になる」

妻「日本や世界を何とかしようと思つている人は何人もいると思いますよ。でもね、田中家を何とかするのはあんただけやねんと言つと、笑つてごまかすだけ」

夫「安心しとき。世界遺産の次、今は何もしたいと思つてないから。ま、日本を何とかしたいと思つていけるけど」